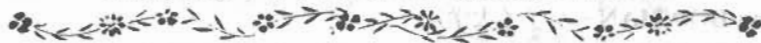




あるささやかな願い

——せめて西条キャンパスには自然を残してほしい——



理学部 下田 路子

西条盆地の変化

広島大学の統合移転地が当時の賀茂郡西条町に決まったのは1973年で、翌年には「人間と自然の調和をめざす学園都市」構想をかかげて、東広島市が発足した。筆者はそのころから、西条町や八本松町の植物を調べるために西条盆地を歩き回るようになった。

やがて盆地の中央で広島大学の造成工事が始まり、そして「広島中央テクノポリス構想」が現れた。それにつれて、のどかな農村地帯と思っていた西条盆地では、大規模な土地開発が次々に行われるようになった。西条駅の近くにはたくさんの新しいビルが建ち、山林が造成地になり、水田地帯に広い道路ができ、池を埋立てて学校ができるといった具合で、最近は特に変化が激しくなったようである。

「広島中央テクノポリス」の建設構想の前では、「自然保護」や「環境保全」などという概念は吹き飛んでしまったのだろうか。長年西条盆地で暮らしてきた方々は、この環境の急変をどう思っているのだろうか。この現状を地域の活性化あるいは発展として、好ましく考える人ばかりなのであろうか。美しい農村の景観が消えてゆくのを惜しむ声や、自然破壊に対する危機感はないのであろうか。

筆者が観察を続けていた池や湿地が、突然埋め立てられたり、あるいは水がひどく汚されたこともあった。水がきれいな植物の多い池も、いつ埋め立てられるか、または水が濁ってしまうかわからず、びくびくしている現状である。広島県下でこの地域ほど湿生・水生の動植物が多いところはほかには無いのに、それがどんどん消えていくのは残念でたまらない。筆者には、人間が今、取り返しのつか



図1 かつての二神山ブドウ園
現在はアカデミック地区になっている。

ないことをしているように思えてしかたがない。

西条キャンパスの出現

現在西条キャンパスに通勤・通学している人々のうちで、キャンパスができる前の様子を知っている人はどれくらいいるであろうか。おそらく、そんなことなど考えたこともない人がほとんどであろう。

現在の「アカデミック地区」のなだらかな傾斜地のほとんどは、戦後開拓して作られたブドウ園であった(図1)。土地の買収がすみ、ブドウ園に人手がはいらなくなると雑草がのび放題になったが、それでも造成工事が始まるまではブドウは毎年実っていた。

アカデミック地区の南端にある角脇調節池の底は、谷間の水田だった。大学の移転が決まってしばらくすると、予定地内の水田は放棄水田になり、春にゲンゲが一面に咲くとそれはきれいであった(図2)。

生物生産学部の農場となった場所には、鏡



図2 放棄水田に咲くゲンゲ



図3 鏡部落の土手に咲くヒガンバナ
ここは生物生産学部の附属農場になった。

という小さな集落があった。南向きの斜面は棚田で、その土手にはヒガンバナがたくさん生育していた。9月の下旬には、ヒガンバナの真っ赤な花がいっせいに咲いた(図3)。鏡には農家・水田・畑・ため池・竹やぶ・雑木林などが、こぢんまりとまとまって美しい農村の景観を保っていた。村ごとそのまま保存しておけたらよいのといつも思っていたが、もちろん今はその面影もない。

そのほかの地域は、ほとんどがアカマツ林であった。当時は今のような松枯れはなく、山は緑だった。こんな所を切り開いて広島大学が移転してくるなどとは信じられない思いで予定地の植物を調査したのは、もう15年くらい前のことだ。いっしょに山の中を歩いた先生方のうち、すでにお二人は退官されたし、当時の同級生達は(もちろん私も)中年になってしまった。

移転など本当にできるのだろうかと思っていたが、造成工事が始まると環境の変化は速いもので、現在日本各地で行われている土地開発の縮図を見る思いだった。造成地や広い道路ができていくころから、松枯れが始まり、山地には幽霊のようなアカマツの枯木が増えていった。

西条キャンパスに残った池や湿地

アカデミック地区や農場はもとの地形もわ

からないほどの変わりようだが、それ以外の地区では山林やため池がほぼもとのままの状態に残っているところが多い。山あいの水のきれいな池や湿地ではたくさんの水草や湿生植物が見られ、またマルバオモダカやサギソウのような我が国で絶滅のおそれがある植物も生育している。これらの池や湿地はキャンパス内に残された貴重な自然環境といえる。キャンパス内とキャンパスに接した地域にある、水生・湿生植物の豊富な池を図4に示した。図4のA-Fのため池群について、以下に簡単に説明しておく。

A地区：この地区のため池は大学の敷地の外にあるが、池岸の一部はキャンパスと接しているし、水は池の背後のキャンパス内の山地から流れ込んでいる。どの池にも水草が多く、また岸には多様な湿生植物群落が見られる。山あいの二つの小さな池の水はことにきれいで澄んでいる。

B地区：どの池にも水草が多く(図5)、トンボなどの水生動物も多い。また岸には狭いながら湿地があり、湿地特有の植物を見ることができる。なおこの地区の東にある道路の脇や池のそばに、ごみを詰めたビニール袋や蛍光灯がすててあった。これは非常に見苦しくなさない光景である。

C地区：大きな「山中下池」では、入江などの水の浅い部分に水草が生育している。小

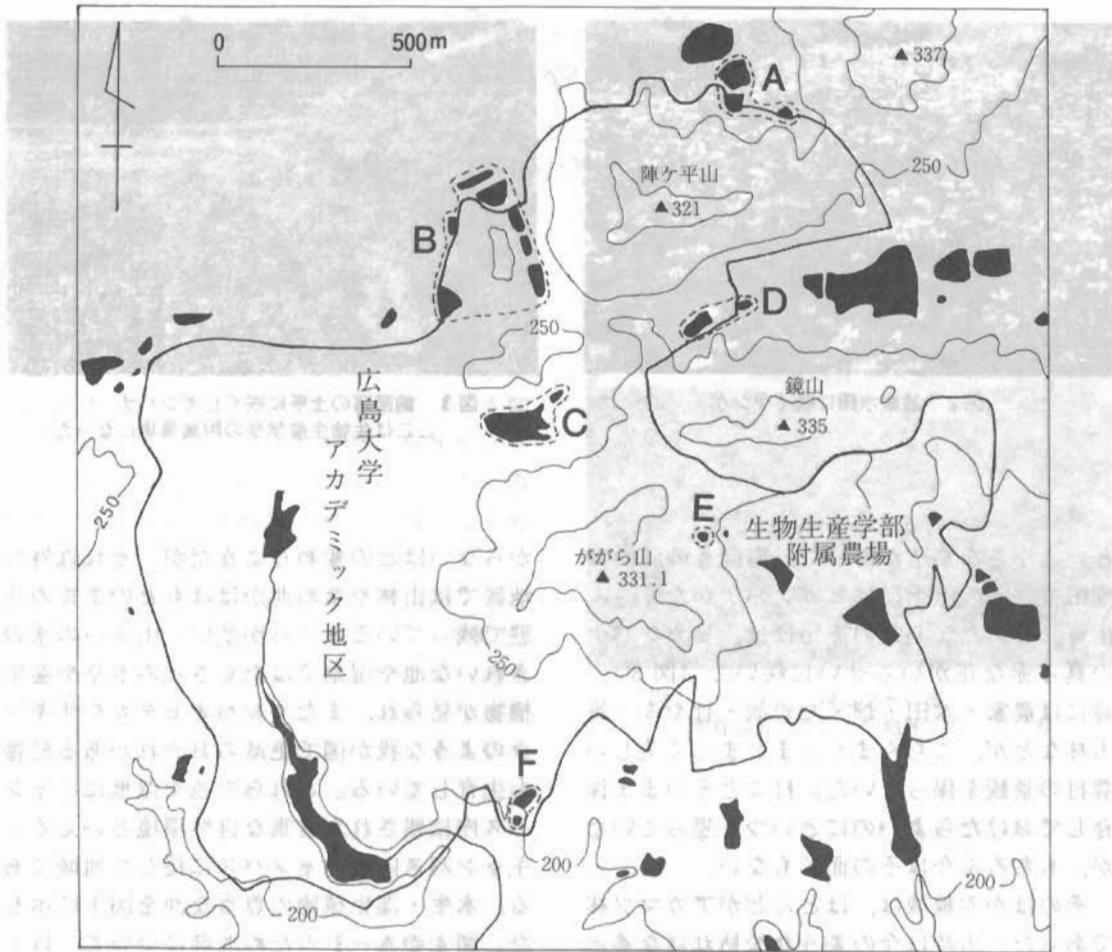


図4 西条キャンパスと周辺地域の地形図。

A-Fの地区にある池は水がきれいで、池の中や岸にはたくさんの水草と湿生植物が生育している。これらの池と湿地は、キャンパス内に残された貴重な自然環境である。



図5 ジュンサイが多い「湯池」(B地区)

小さな「山中上池」では池一面に水草が繁茂し、池の背後には学生宿舎がある。
 D地区：両方の池にヒツジグサが多く、夏から秋にかけてまっ白な花が水面を飾る(図6)。二つの池の間にはハンノキの湿地林があり、また大きい方の「不二子丸(藤ノ丸)上池」の岸には湿地がある。
 E地区：山あいの小さな池であるが水草が多く、岸には小さな湿地もある。
 F地区：土の方の「奥池」にはジュンサイが、また下方の「かがつ上池」にはコウホネ

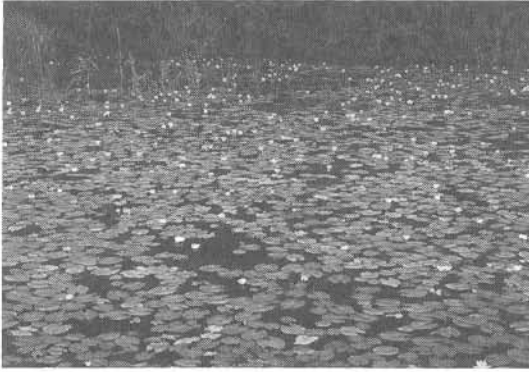


図6 ヒツジゲサが咲く「不二子丸(藤ノ丸)下池」(D地区)

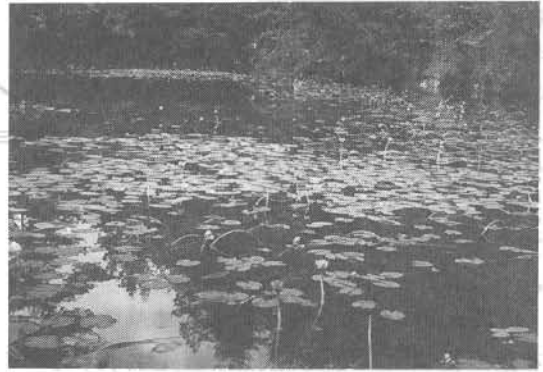


図7 コウホネの一種が咲く「かがつ上池」(F地区)

の一種(図7)が生育している。また「奥池」の東岸の斜面には湿地があり、湿地特有の植物群落が見られる。

以上のため池群は、周辺の山地も含めて現状のままで残してほしい。これまで農村で長年やってきたような、水位の調節や堤防の草刈り程度の管理で十分であろう。池の周囲に遊歩道や公園を作るのは、少なくとも大学の中ではやめてほしい。小規模な土木工事でも、池や湿地には深刻な影響を与えるし、回復不可能なダメージとなることもある。そのような例を、筆者はこれまで西条キャンパスのまわりでたくさん見てきた。

西条盆地では、今後も「学園都市」や「広島中央テクノポリス」の建設をめざして大規模な土地開発が続くことであろう。その土地開発の引き金になった広島大学だからこそ、せめてキャンパスの中には、かつての西条盆地の面影を残してほしい。「こんな池が何の役にたつのか」とか、「自然のままでは何の

利益も得られないではないか」といった考えを自然に対して持たずにすむのは、おそらく西条盆地では大学の中だけになるであろう。

たしかに、池や湿地がはっきりとした経済的価値を持つとは言えないが、多様な動植物が生息する自然環境は、金銭的な価値を越えた存在であると筆者は思っている。広島大学が自然環境の保全に真剣に取り組んで、「人間と自然の調和をめざす大学」になることを祈っている。

あとがき

昭和63年度教育研究学内特別経費により「広島大学西条キャンパスの植物相と植生の動態に関する基礎的研究」が行われ、筆者は池と湿地の植物調査を担当した。この調査結果をそれ以前の調査結果と比べることで、西条キャンパスや周辺地域の植物と自然環境の変化をあらためて見つめなおすことができた。西条キャンパスの現状の記録は、今後の研究にとっても貴重な基礎資料になるであろう。

